

博士學位論文

内容の要旨

および

審査結果の要旨

甲第48号

2006

創価大学

本号は学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第8条の規程による公表を目的として、平成18年9月23日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位番号に付した甲は、学位規則第4条2項(いわゆる課程博士)によるものである。

創価大学

氏名（本籍）	伊藤 貴雄（熊本県）
学位の種類	博士（人文学）
学位記番号	甲第48号
学位授与の日付	平成18年9月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 創価大学大学院学則第17条第2項 創価大学学位規則第3条の3第1項該当
論文題目	初期ショーペンハウアーの社会哲学的研究
論文審査機関	文学研究科委員会
論文審査委員	主査 石神 豊 文学研究科教授 委員 三浦 弘万 文学研究科教授 委員 宮田 幸一 文学研究科教授

2006年7月14日

博士論文審査および最終試験報告書（課程博士）

主査委員 石神 豊
委員 三浦 弘万
委員 宮田 幸一

博士（人文学）学位請求論文提出者

氏名 伊藤 貴雄（いとうたかお）（男）

生年月日 1973年8月14日（32歳）

論文題目

「初期ショーペンハウアーの社会哲学的研究」

審査対象となった上記論文は、序論、第1章から第6章までと、補論とからなり、そのほかに参考文献が付せられている。分量は400字原稿用紙換算で、およそ650枚程度である。

本論文に対して、主査（石神）と副査2名（三浦、宮田）の計3名は慎重に審査し、論文公開発表会も経たのち、最終試験を終え、ここにその審査結果を報告する。

1 内容の要旨

まず、論文内容の要旨について記す。

伊藤氏は、博士前期課程入学以来、ショーペンハウアーについて研究を進めてきた。本論文としてまとめた内容は、10年近くにわたる研究に基づくものであり、すでに各種の専門学会誌等に掲載されたものも含まれている。

本論文は、タイトルに示されるように「初期ショーペンハウアーの社会哲学的研究」である。「初期」とは1804年（ショーペンハウアー16歳）から1818年（30歳）にいたる15年ほどの時期をさすが、この時期のさまざまな種類の筆記、研究ノート類が現在、『初期遺稿集』として刊行されている。この遺稿集のほかに、1813年に提出刊行したショーペンハウアーの学位論文である「充足根拠律の四重の根について」（「根拠律」と略す）はとくに重要だとみなされ、そして『意志と表象としての世界』（1818年初版）へといたる。

どのような観点から研究を進めるかにあたって、伊藤氏がとった立場は「社会哲学的観点」である。これは、従来のショーペンハウアー研究が、ほとんどとることのなかった観

点であり、その点、同テーマを扱う先行研究がほとんどないという状況のなか、氏は初期ショーペンハウアーの思想形成を当時の社会史的コンテクストに置くことによって、独自に読み解こうとした。こうした研究に当たって重要なことは、テキストを通時的に丹念にみていくことであるが、氏はこれまで見過ごされがちであった初版のテキストを重視することで、思想形成のプロセスをリアリティをもったものとして追求した。

ドイツ・イデアリスムスとショーペンハウアーの関係は、近接と反発という両極存在的な関係をもっている。そしてとくに初期ショーペンハウアーの思想形成に深く関与した人物が、ベルリン大学初代学長ともなった、ドイツ・イデアリスムスの巨人フィヒテであった。伊藤氏の論文は、フィヒテとの対決をめぐるショーペンハウアーという構図から出発するが、そこからさらに踏み込んで、当時のドイツ史の問題へも言及し、また国家、戦争、兵役をめぐる思想史的な問題へも立ち入ることとなる。一般哲学的意味における問題としては、「ショーペンハウアーにおける個と共同性」の問題ということになるが、本論文は、当該問題を社会哲学的に論じたものである。

論文は序論において、研究主題・先行研究の紹介・研究方法を述べた後、論文全体の概略を記している。概略は論文全体を俯瞰する上でかなり有効・便利なものとなっている。また、ここでの先行研究では、歴史的ともいえるショーペンハウアー理解をめぐるものであり、ルカーチとホルクハイマーの相反する理解が紹介されている。第1章は、『初期遺稿集』の時期全体をめぐってショーペンハウアーの問題意識を跡付け、本論文全体の予備考察という意義をもたせている。ここで浮かび上がる問題が、共同性と共同体の問題、つまり「国家は真の共同性たりうるか」という問題である。

第2章では、とりわけショーペンハウアーの博士論文であった『根拠律』を対象として、この論理的論文の背景にじつは社会哲学的問題があることを示していく。ショーペンハウアーのフィヒテ批判は、根拠律そのものの誤解であるとともに、さらにはその根拠を「国家」としてしまったということにある。1813年の対フランス解放戦争におけるフィヒテの言動は国家主義的なものであり、それに対してショーペンハウアーは自らをコスモポリタンとして位置づけていくという経緯があった。ここに国家の問題、とりわけ戦争をめぐる思想的問題が提起されるのである。

第3章から第5章は、第2章の問題提起を受けて、近代国家思想および軍制・兵役をめぐる問題を論じていく。第3章は近代全体の歴史から、第4章ではカントの永遠平和論をめぐっての解釈、そして第5章ではフィヒテ哲学が「国民皆兵制」を支持するにいたる事情を哲学史・社会史的に構成していく。評価は離れても、ショーペンハウアー研究としてこの章は、きわめて独自なものであるといえる。

第6章は、これまでのまとめの章であるとともに、主著とされる『意志と表象としての世界』の叙述を通して、フィヒテ的な国家（共同体）を中心とした社会哲学と、ショーペンハウアー自身が考えるところの共同性の社会哲学の相違を明確にしている。そして、両

者のカント倫理学の継承の仕方が異なっていることを指摘している。なお、最後に付した補論は、伊藤氏におけるショーペンハウアー研究の最初期の論文であり、氏のショーペンハウアー哲学への関心が「共苦」の思想にあったことを示している、提出論文全体にとっても、この補論は参照するにふさわしい内容をもったものである。

2 審査結果の要旨

本論文の公開発表は7月6日に行われたが、同日、引き続き口頭試問の形で最終試験を行った。3人の審査委員と伊藤氏との質疑応答がかなり長時間にわたってなされ、そのあと審査員による評価を合議決定した。

代表的な質疑をあげる。

「ショーペンハウアーにおける兵役拒否体験とは具体的にはどの程度のものであり、どの程度の切迫性をもっていたか。また、国家についての意識はどの程度もっていたのか。」「先行研究について、初期ショーペンハウアーについてのものはあるか。」「概念とイデーはどのようにその性格が違うのか。」「イデーから共苦への移行プロセスがいまひとつ不明瞭ではないか。」「イギリス経験論、スミスなどの道徳感情論がショーペンハウアーの共苦へ与えた影響はないか。」「カントが国民皆兵制を支持したということは明言してよいか。」「ショーペンハウアーは、自身が述べた「意欲 Wollen」と「意志 Willen」の違いを貫徹していないように思われるがどうか。」「物自体としての意志については語れないはずであるが、語るようになるのでは、フィヒテ批判の意義が失われないか」等。

これらの質問のそれぞれについて、伊藤氏は真摯かつ丁寧に応答をした。また、論文において追求不足の個所や事柄については、個所によってはこれを認め、今後の研究をさらに進めたい旨を示した。応答については、おおむね満足しうるものであった。

序論についてはまとまりの点でやや不十分であるが、他の各章はよくまとまりを見せている。各章は、課題の提示、内容の展開、そして小括という、きわめて明瞭な構成がなされている。各章の連結（の説明）にはやや強引にみられる点がなくもないが、しかしこれは、はじめに各章が独立して執筆されたという性格からきたこともあり、内容的にみれば論文全体の流れはいたって自然でもある。

論文内容の展開には、個所によっては、やや伊藤氏の思いが先に走り、ショーペンハウアーの叙述からみると、はたしてこう理解してよいかと思われる面がある。その点について、さらにショーペンハウアー自身の記述を正確に読み取る必要があるが、じつはショーペンハウアーの叙述自体が不明瞭な面があり、ショーペンハウアー研究の難しさをうかがわせる。このショーペンハウアーの叙述の不明瞭な点をも視野に入れての内容整理が必要

であろう。とくにショーペンハウアーが使用する語句が、必ずしも一般的に理解されるドイツ・イデアリスムスの使用法とも同一でない面があり、その点への配慮も必要となる。

また、歴史的事柄を扱う場合の資料使用に関しては、かなりの能力が必要となることはもちろんである。また、フィヒテ、カントといった主要な哲学者との関連を論じるときには、原典の正確な読解が必要であるとともに、一般的解釈についても知悉している必要がある。伊藤氏は、かなり広範に資料に当たり、またドイツ語の読解についてもドイツ文学の翻訳書を出すほどに有能である点、相当な能力をもち、今回の論文においてもそうした力量が示されている。ただこれらの点については更なる継続的な努力が望ましい。

残された問題として、氏は、初期ショーペンハウアーから中・後期へとつづく連続性をどう描くかという課題、ルカーチとは異なる新しい視点からのショーペンハウアー受容史を描くという課題を掲げている。本論文の課題に即して、一つ加えたいと思われるものをあえてあげれば、当初伊藤氏が論じた共苦の問題を、共同性の問題と関連して、さらに認識論的にできるかぎり明確にするという課題である。

伊藤氏の論文が、ショーペンハウアー初期の思想形成を丹念に追及しようとした点、またそれを社会哲学的な観点を取り入れて研究を進めた点、その着眼点、手法ともに高く評価できるものである。学界においてもこうした視点からのショーペンハウアー研究はこれまで希少とみられ、日本ショーペンハウアー協会等も伊藤氏の研究の価値を認めているといえよう。今回の提出論文は、伊藤氏のこれまでの研究の集大成であり、博士学位請求論文として十分な内容をもつ、またオリジナリティをもった意欲的な論文だといえる。

また形式的な点においても、たとえば論文構成についての整備、誤字脱字の類がほとんど見当たらない点なども、評価しえよう。

以上をもって、伊藤貴雄氏の提出論文は、博士（人文学）を授与するにふさわしい内容のもものと判断する。

以上